人づくり 国づくり 867

神原 宏達　ツネイシホールディングス代表取締役社長

イエナプラン小学校初代ＰＴＡ会長

無限の可能性引き出す後押し

本社がある常石（広島県福山市沼隈町常石）は、北に山を抱え、海岸線が長い土地柄です。広い田畑を持たないが故に、人々は古より漁業と回船業と船造りを生業としてきました。世界につながる海が「進取の気概と助け合いの精神」を生んだと考えています。

この地に創業して120年、海運・造船を軸に環境・エネルギー・ライフ&リゾートの分野で、国内外に事業を展開してきました。

創業者の神原勝太郎は、「教育こそ村（国）の根幹である」という信念を持って、郷里の発展に尽力しました。続く代々の社長も、事業を今日の姿に発展させながら、雇用の創出と同時に福祉や郷土文化の基盤づくりを重視し、現在は一般財団法人「ツネイシみらい財団」を運営しています。

学習をサポートする塾やプログラミング教室の他、サッカースクールなどを通じて子どもの健全育成と地域の活性化を目指しています。

私のミッションは、10年、20年、いや50年先を見据えた戦略を立て、事業の安定と発展によって社員とその家族、地域に暮らす方々の幸せを実現することです。

本年度は、官民協力で「福山市立常石ともに学園」が開校しました。この小学校は、イエナプラン教育の精神を採用しました。その「自律と共生」は、多様性を強みとする弊社の方向性に合致しています。常石ともに学園で学ぶ子どもたちは、将来、自らが描く将来像を仲間と共に実現できる力を持てると、大いに期待しています。

未知数の多い学校を創立することの大変さは（起業と似ていて）企業人にはよく分かります。長い目で見守り、地域を挙げた協力が不可欠です。私も初代ＰＴＡ会長を買って出ました。地域コミュニティーとの連携や企業からの支援を充実し、子どもたちの無限の可能性を引き出す組織を構築したいと考えています。

先日、犬と散歩していてひらめいたことがあります。学校周辺の空き家をリノベーションし、音楽・美術・ダンス・工作など、感性や創造性を育む場にして、放課後、子どもたちが自由に出入りできれば、常石ともに学園を取り囲む、豊かでユニークなアカデミックゾーンが出現する。同時にそれは、空き家対策や地域に眠る人材活用にもなる―。きっとこれは、近未来の日本の風景になるでしょう。

2023年に創業120年を迎えるに当たり、「未来の価値は今創る」という新しい企業スローガンを定めました。

地域の子どもたちは未来そのもの。彼らの未来を豊かにするための労は惜しみません。

かんばら・ひろたつ　神原汽船入社後、ツネイシホールディングス代表取締役副社長などを経て平成28年から現職。48歳。

次回は染谷隆夫・東京大学工学部長

書評

ＧＩＧＡスクールのなかで教育の本質を問う　子ども主語の学びと現場主語の改革へ

石井　英真　河田　祥司　著

目指す授業像や教員研修など語る

日本標準　2200円
☎04・2935・4661

1人1台端末が実現して2年目。導入当初はさまざまな課題が浮き彫りになったが、現状はどうであろうか。

本書は「1人1台端末で問われる教師の教育観と学習観」「ＩＣＴを活用した学びを加速させる条件整備とは」の2章構成で、著者二人の討論や、それぞれの小論が掲載されている。

最初の章ではまず「どうすればＩＣＴの日常化を図れるか」、つまり教具から文具へ考え方を転換できるかを課題としている。そこから子どもが中心で、教師が伴走しながら創る授業への転換を述べている。特に「図工科や技術科で見られるような個人作業がたまに交わる感じや、あるいは、総合学習のように、大きなプロジェクト型の課題に協働で取り組むような自由度の高い展開」という授業像が分かりやすい。

第2章では教育委員会の担当者として、導入に当たっての苦心が述べられる。特に1人1アカウントとその管理の重要性、教員の活用促進のための方策を述べている。中でも3年計画での「量から質」へのバージョンアップ策や教員研修の見直しで放課後30分のオンライン研修の実施などが興味深い。

ほとんどの教師が小・中・高時代にＩＣＴを活用した授業を受けた経験がない。試行錯誤の状況はまだまだ続くが、これからの教育には必要不可欠だ。多くの教師や教育委員会関係者に読んでほしい一冊である。

（中村　豊・公益社団法人日本教育会事務局長）

一語から始める小さな日本語学

金澤　裕之　山内　博之　編

ユニークな視点で身近な言葉を探究

ひつじ書房　2860円
☎03・5319・4916

本書は、17人の日本語学研究者の手による新たな日本語学研究の試みである。普段何げなく接している言葉に隠されている秘密が徐々に解き明かされていくような、そんなワクワクした感覚を味わいながら読み進めた。

著者たちは、日本語以外の言語を母語とする留学生や日本語母語話者の学生に対する豊富な教育活動の経験を持つ。そうした活動を通して抱いた疑問や興味に基づき、それぞれの著者は一つの語に注目し、研究の素材とする。その語とは、名詞、動詞、形容詞のような実質語である。次に挙げた五つの章のタイトルには、研究の出発点が表現されている。「わーい」っていつ使う？（第1部）、教授のおっしゃるとおりです（第2部）、母は親切です（第3部）、さっくり混ぜる（第4部）、きっかり10時（第5部）。その他の章も含めて、タイトルからして読者の目を引く。

研究の始まりとしての一つの実質語は、さまざまな日本語コーパス（書き言葉や話し言葉）や独自の調査によって、その意味や役割が徹底的に究明されていく。そのプロセスは、論理の筋道を丹念に追っていくものであり、明快で知的好奇心を満足させてくれる。さらに、たとえ小さな発見であっても、大きな研究的な価値を持つと感じさせてくれる。

読者は、児童・生徒が発する言葉の重みや大切さを再認識することができるであろう。

（都筑　学・中央大学名誉教授）

子どもの非認知能力を育成する教師のためのソーシャル・スキル

河村　茂雄　著

子どものタイプに応じた対応を解説

誠信書房　1980円
☎03・3946・5666

資質・能力（コンピテンシー）という言葉が一般化してきた。これは、「知識・技能」と、それらを活用できる「思考力・判断力・表現力」などの「認知能力」と、目標や意欲、興味・関心を持ち、粘り強く、仲間と協調して取り組む姿勢、いわゆる「学びに向かう力や姿勢」といわれる「非認知能力」の二つの能力が内包される。

本著の研究対象モデルは、学級内で特別な支援を直接的にされていない多くの〝ふつう〟の子どもである。「主体的・対話的で深い学び」が問われる今後の学校教育の中での〝ふつう〟の子どもたちの非認知能力の低下の実態や背景をつまびらかにしつつ、児童期以降に教育がどのように非認知能力を育成していくかを理論と具体を兼ね備え解説している。また、これからの教師には、非認知能力の低い子どもを前提に、認知能力の支えとなる非認知能力が形成されるよう支援していくことが求められることを強調している。

第2章までは、非認知能力の重要性について心理学的見地から学際的に解説がなされている。第3章以降で非認知能力を育成する指針や具体的事例、「アドボカシー（その人の意思や権利を伝える支援）」などの手法が分かりやすく子どものタイプに応じ記されている。大きなポイントは「とにかく行動する」ととし、五つのスタンダードなポイントが示され必見に値する内容である。

（中川　修一・東京都板橋区教育委員会教育長）

学びが地域を創る　ふつうの普通科高校の地域協働物語

山根　俊喜・武田　信吾　今井　典夫・藤井　正　筒井　一伸　編著

廃校危機に動いた学校、応えた人々

学校の誕生から歴代校長たちの物語」（第3部）を、地域が学び、地域を創る。

統廃合問題に動いた教員が高校を支えるべく取り組んだ教員が、「未来の価値は今創る」という新しい企業スローガンを定めました。

地域の子どもたちは未来そのもの。彼らの未来を豊かにするための労は惜しみません。

次回は染谷隆夫・東京大学工学部長